

---

# An amatuer detective in the train

寝村萬寺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A n a m a t u e r d e t e c t i v e i n t h e t  
r a i n

### 【Nコード】

N 9 7 9 9 C

### 【作者名】

寝村萬寺

### 【あらすじ】

クリームパンが欲しいので推理し始める学生のお話

## （前書き）

あらすじ的には面白くなりそうだったけど俺の文章力と推理根拠がいまいちかみ合いませんでした（；、、）

彼がクリームパンをこれほど魅力的に感じたことは多分生きてきて初めてだろう。

朝食になにやらしょぼい菓子パンを食べて以降、大学でも何も食べなかったし、実際自宅に向かうこの電車に乗るまで缶コーヒー以外は何も口にしていない。単に金欠のせいなのだが別にそれはこの話とは関係ない。

車両が揺れる中、はす向かいの男が電話で何事か喋っているのが聞こえる。

実際、目の前にはクリームパンがある。自分のクリームパンなら単に袋を開けて食べるだけでいいわけだが、さっき乗ってきた中年男の物な訳で勝手に奪い取れば窃盗だ。なんとかして、食べたいなあとはんやり考えている。ここで一つの光明が射す。中年男はカバンの中から本を取り出した。その本は「失樂園」。この手のおっさんが不倫へと憧れを抱いているのはいつの時代でも変わらないのかなどととりとめのないことを思いながら、渡辺淳一に感謝し計画を行動に移すことにした。

「ねえ、すみませんけど、そのクリームパンくれませんか？」と聞いてみた。彼の推理ではこれは断られる。このおっさんは相当に忸怩だ。

「別にケチってる訳じゃないが、売るんならまだしもタダでやるきにはならんね。」

けちなやつに限ってそういう事言うんだよ、と毒を吐きつつも内心ここまでは彼の計画どおりである。

「じゃあ、不倫とか興味ないですか？」

無論だが若い男にこんなこといきなり言われたら怪訝な顔をするだろう。予想通りおっさんは怪訝な顔をして少し考えた後で

「ごめんな、にいちやん。俺はそっちのケはねえんだ。」

と言った。くそ、予想通り過ぎるだろ、このおっさん、俺だつてそんな趣味ねえよ、と思いながら

「ああ、いえいえ、そういうことではなくて。この車両に不倫カップルが乗ってるんですが、そんな話に興味はないですか？」

こういうとおっさんは急に目を輝かせて辺りを見回し始める。オフシーズンの特急電車ではあるが終点が温泉地の駅なのでそれなりにカップルはいる。とはいえカップル3組、あとはおばさん4人のグループと、中年男と彼の12人である。

ここで電車と車両内の説明をしておこう。電車は温泉地・城崎へと向かう特急列車の最終で、城崎着8時、途中停車駅はこの後城崎を含め3駅である。よって、おそらくおばさん4人グループは旅行帰りである。これは容易な推理でおばさん4人が8時から片田舎の温泉に行くと言う可能性より逆にバーゲンか何かに行つてきてその帰り道であると考えるのが順当である。問題はここから、男女のカップルは3人。

おっさんは凄い食いつきぶりで、三組のカップルを全て見回したあとで

「あの中年カップルだろう？手を握り合ってるし」と安っぽい推理を彼に披露したが

「いえ、残念ながら違います。二人はおそらく夫婦で最近結婚した所ようです。彼らが愛し合うのは自然なことですよ。でも言うておきますけど、そのクリームパンをくれない限りあと二組のどちらかを説明するわけには…」

おっさんは少し考え、そして仕方なさそうにクリームパンを彼に渡した。

「そのクリームパンを食う前に説明しろ、俺が納得しなかったらクリームパン返せよ。」

なんと言つかクリームパンを人にあげるのが嫌と言うよりは騙し止れるのが嫌なんだろう。プライドだけは随分と高いものだ。

「ええ、もちろんです。まず、さっきおっしゃった中年カップルで

すが、残念ながら二人とも結婚指輪をしています。それだけ十分な気がしますが、さらに言い足すと、彼らがお土産を持っていることです。つまりこれから行くのではなく、もうすでに行った後で帰り道にもかかわらずペアリングをしている。ならば夫婦である可能性が最も高いわけです。」

と言うと

「指輪なんかここからじゃ見えないぞ」

と文句をいつてきたが、実際に車両の端っこに座った人の指輪を見るには視力が必要だ。

「僕はあの人たちが隣を通過した時に見ました。ちなみに全てのカップルについて観察してますよ」

というと

「あんた、いつもそんなことしてるのか？」

と疑わしそうにこちらを見ている。仕方がないので

「そんなに疑わしいなら確認してきてください」

と促した。実際にトイレに行くフリをして3カップルの指や身なりを確認してきた。

「あと一つの不倫カップルでないのは、あの若い女とおっさんの二人です。なぜなら……」

と言いかけた所でおっさんが

「ちよつとまで、じゃあ、あのどう見たって母と息子って感じのあの二人が不倫だって言ってるのか？」

「そうです。その前に若い女とおっさんはですね、」

と言うと、おっさんは

「それはどうでもいい。じゃなくて不倫の二人の話聞かせてくれ。」

と言う、かなり焦っている模様だ。

「じゃあ、不倫カップルですが、まず引っかけたのはおばさんの方が指輪をしていません。であると結婚していない、あるいは外している。外している理由はサイズが合わないとか普段は付けないの

だとかいろいろありえます。もちろん中には不倫もありますがまだ可能性の一つでしかありません。ちなみに男のほうは、左手の薬指に指に指輪の日焼け跡があります。」

だからなんだと言う顔でおっさんは釈然としない模様である。

「次に二人は二人とも車を持っています。車のキーは確認済みで、女はベンツで男はダイハツの軽自動車のようです。しかも、女のほうで2号線で渋滞が大変だったと話していました。二人が夫婦ならかなり不自然です。夫婦で旅行に行きたいなら車で行けばいいし、どうしても電車で行きたいなら一台の車で駅まで来たほうがお得です。と言うことは二人は夫婦ではない。おばさんは未婚あるいは既婚で、男は既婚であるが、二人は夫婦ではない。」

おっさんは小さく頷いた。

「ですが、息子が結婚後、母と旅行に行くと言う可能性はまだ残されています。これを否定したのは二人の携帯電話でした。二人は携帯電話の電源を切っています。さっき電話がかかってきた時に、二人で電源オフにする所を見ました。二人が親子なら携帯電話の電源を切るのはおかしいでしょうから、普通に考えれば知られてはならない関係、つまり不倫カップルであると言う結果に落ち着きます。」

おっさんは頷いて

「まあ、クリームパン一個分ぐらいの推理だな」

と正直な感想を言った。

(後書き)

ぶっちゃけ超イマイチです

我ながら死ねばいいのに。

ここをこうすればいいとかあれば送ってくらさい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9799c/>

---

An amateur detective in the train

2010年10月17日04時41分発行